

地理学会ニュース 2023年度 第3号

法政大学地理学会 2024年1月20日発行

法政大学地理学会 2023年度 第1回例会（日帰り巡検）の報告 テーマ：土石流災害からの復興および中心市街 地活性化の現状をみる

本年度の第1回例会（日帰り巡検）は2023年9月23日（土）に、「土石流災害からの復興および中心市街地活性化の現状をみる」とのテーマで開催し、静岡県熱海市にて巡検を行った。コロナが全面解除されたこともあり、今回は久しぶりに東京から離れた地域にて巡検を行ったためか、応募者ならびに委員合わせて参加者は11名と少なかったが、その分意欲的な参加者が多い印象であった。巡検の趣旨・狙いとしては、第1に、2021年7月に熱海市伊豆山地区で発生した土石流がどのように生じたのか、そして災害から2年が経過した現地の復興状況がどのような状況であるのか確認することと、第2に、団体旅行（マス・ツーリズム）の終焉とともに観光客が激減した温泉観光地としての熱海が、その後さまざな形態の観光客（オルタナティブ・ツーリズム）をどのような形で惹きつけ、再び人気を博すように

なってきたのか探るとともに、その結果として中心市街地の再生がどのような形でなされつつあるのか確認することにあつた。

午前10時に熱海駅に集合し、全体行程の説明がなされた後、バスにて15分程の伊豆山地区の土石流災害の発生地点に到着した。多くの所で進入禁止の規制線が張られており、いまだ復興の途上であることが痛感させられた。災害の現場を確認すると、谷間に沿って土石流が生じたことがわかった（写真1）。建設し直された道路は谷筋にかかる部分であり、谷底に近い部分には棚田のような形状をしていた。この場所では稲が風になびいているわけでもなく、枯れ草や空き地が広がるばかりであり、恐らくは家屋があった場所であろう。家屋の基礎の人工物や微地形のみが残っている光景は、かつて東北地方太平洋沖地震で津波被害を被った地域の光景と重なった。上物である家屋が跡形もないという同様の景観が広がっていたことに自然災害、加えて今回は人災の恐ろしさを感じた。被災地を訪問するダーク・ツーリズムという言葉があるが、これは見学者の態度によって



写真1 伊豆山地区の土石流災害地の見学
（右の山手から左に土砂が流れた）



写真2 熱海銀座商店街の賑わいの様子
（多くの観光客であふれているのが分かる）



写真3 起雲閣の建物と庭園

は観光公害になる負の側面がある。現に、今回の土石流災害の現場には「近隣住民は静かに暮らすことを望んでいます」「撮影禁止」と記された看板が多数設置されており、見学者と住民の間で軋轢があったことが窺えたため、一行は 11 名という人数であることも鑑みて必要最低限の見学をした後、現場を後にした。

熱海駅前に戻った後、観光客で混雑する熱海駅から延びる 2 本の商店街を散策し、曲がりくねった坂道を下って海岸に近い熱海銀座商店街に移動した。ここでは、NPO 法人 atamista の方に中心市街地の再生の状況を案内していただいた。商店街は人通りが多く、近年出店したと思われる店舗も散見されるなど賑わいがあった(写真 2)。高齢者よりも数名の若者グループやファミリー層の姿が多くあった。かつて団体旅行客が主であったマス・ツーリズムの時代とは隔世の感がある。昭和レトロな店舗や廃墟のようなマンションもあったが、若者向けのカフェや雑貨店も多数確認できた。これらの店舗の中には上記の NPO 法人が手掛けたものもあり、それらを中心に中心市街地の再生が起こりつつあるとのことであった。また、同法人は既存の建物をリノベーションしてシェアオフィスも手掛けるなど、多様な方法で中心市街地の賑わいを、そして熱海全体の活性化を図る取り組みを手掛けていた。現地を見ると、実際にその取り組みが実を結びつつあることがわか



写真4 小山海岸の波にもまれる矢穴石



写真5 小山海岸にて矢穴石を探す一行

る一方、熱海銀座商店街から少し離れた場所になると、そのような新たな動きは及んでいないことも確認できた。こちらの再生もまだ途上の段階であることが感じられた。

昼食後は中心市街地内にある起雲閣を見学した。なお、どの飲食店も観光客でごった返しており、参加者全員で入れる店舗はなかったため、昼食は各自で摂ることとなった。この点からも、熱海の観光地としての盛況ぶりが感じられた。

起雲閣は 1919 年に建築され、根津嘉一郎などの実業家や政治家によって所有された別荘であり、戦後は旅館として活用されていたが、旅館の廃業後は熱海市によって所有・管理されている。和洋折衷の近代建築であり、徐々に建て増しされたこともあり、部屋によって趣が異なって面白い。調度品も立派である。また、広い回遊式庭園と建物が調和しており(写真 3)、当時の流行やそれら所有者の財力が窺い知れる。

起雲閣の見学後は再びバスで移動し、来宮駅

(熱海駅の隣の駅) から JR 伊東線に乗り、網代駅まで移動した。伊東線は JR 線であるにも関わらず、伊東線の直通先の伊豆急行線に乗り入れる関係から元東急車両での運用も多く、今回乗車した車両も東急の元通勤車両が改造されたものであった。ここにも「伊豆戦争」の主役である東急の影響が見られるのは面白い。

網代駅に降り、駅前の海産物の土産屋には目もくれず、向かったのは 10 分ほど歩いた先の小山(おやま) 海岸であった。矢穴石があるからである。伊豆半島には江戸城の石垣に使用された石の採掘場や積み出した場所など石丁場と呼ばれる遺跡が多数存在する。この小山海岸もその一つであり、波打ち際や隣接の公園にはその名残を示す矢穴石が存在する。矢穴石には採掘の作業主を示す刻字や刻印、作業過程でつけられた穴などが確認できる(写真 4)。波打ち際の矢穴石を探す作業はなかなか困難であった。波もそれなりにあり、岩もゴロゴロ転がり、事前情報であると言われていた矢穴石は遊歩道デッキのあるエリアから 10 メートル以上先にあったことで、なかなか目当ての矢穴石が見つけれなかった(写真 5)。その後、海岸で矢穴石を見つけ歓喜する一行の姿は、実に地理学的ではあるが、傍から見れば不思議な団体である。なお、起雲閣にも一つだけ矢穴石がある。機会・興味のある方は探してみしてほしい。ヒントは池のほとりである。

また、本会の会員である参加者の一人が石丁場に関する論考を発表していたことから、その参加者からより詳しい説明を受けることができた。このような双方向的なやり取りができるのは、さまざまな経験を有する者が集まる本会の良い点であると考えます。

再び熱海駅に戻り、そこで解散となった。さまざまな観点から熱海をみる欲張った巡検であったため、また、参加者の探求意欲が高かったこともあり、予定の解散時間を超過することとなった。集会委員会としてはタイムマネジメントが不十分であったことを反省するとともに、充実した内容の巡検への参加者が少なかったことが残念であった。これらの点は次の巡検の企画に活かしたいと考える。また、上述のように、参加者からも有益な情報がもたらされた点を鑑みると、会員発意の巡検があっても良いかと考える。次年度以降の巡検においては、会員発意のボトムアップ型の

企画ができることを期待したい。

(集会委員会)

法政大学地理学会 2023 年度 第 2 回例会 (江戸東京研究センターとの共催シンポジウム) の報告

テーマ：関東大震災 100 年 大地震と都市空間
—過去に学び、近未来を描く—

本年度の第 2 回例会 (シンポジウム) は 2023 年 10 月 21 日 (日) に、「関東大震災 100 年 大地震と都市空間—過去に学び、近未来を描く—」とのテーマで法政大学江戸東京研究センターとの共催で対面形式にて開催した (会場は市ヶ谷キャンパス富士見ゲート 4 階 G402 教室)。

シンポジウムのタイトルにあるように、2023 年は関東大震災から 100 年目の年である。そこで、関東大震災が発生した 1923 年の日本、とりわけ産業構造や都市構造、人々の生活などさまざまな面で近代化が進行しつつあった東京に対して、関東大震災が与えた影響を再考すること、そして関東大震災を機に大きく変化を遂げていくことになる東京の軌跡を再評価することを目的として本シンポジウムを企画した。上記の趣旨に則り、陣内秀信氏 (法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授) からは基調講演を、また穴倉正展氏 (国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター連携推進室国内連携グループ研究グループ長、法政大学兼任講師) と鷺崎俊太郎氏 (九州大学経済研究院准教授)、岡村民夫氏 (法政大学国際文化学部教授、江戸東京研究センター兼担研究員) の 3 氏からはそれぞれ報告を行っていただいた。



写真 1 陣内氏による基調講演



写真2 宍倉氏による報告

まず、基調講演の陣内氏には建築史・都市史の分野から「関東大震災と東京の復興—建築・景観・思想・コミュニティ—」とのテーマでご講演いただいた(写真1)。ご講演では古写真や図面などの資料を基に関東大震災の被災状況や震災前後の東京の様子について解説がなされた。震災復興として建設された同潤会アパートなどの住宅、そして学校や公園などの公共施設は意匠が凝らされていただけでなく、コモンスズとして人が集える空間が洒せられており、機能的にコミュニティが意識されているものであった。陣内氏が震災復興事業の成果を調査していた1980年代前半には、それらの住宅や施設は数多く残存していたが、その後急速に失われていったとのことであった。

次に、報告1の宍倉氏には地震学の分野から「地形、地質、歴史記録からみた関東地震の履歴と将来予測」とのテーマでご報告いただいた(写真2)。地形や地質といった自然科学のデータだけでなく、日記などさまざまな史料(歴史記録)を基に、

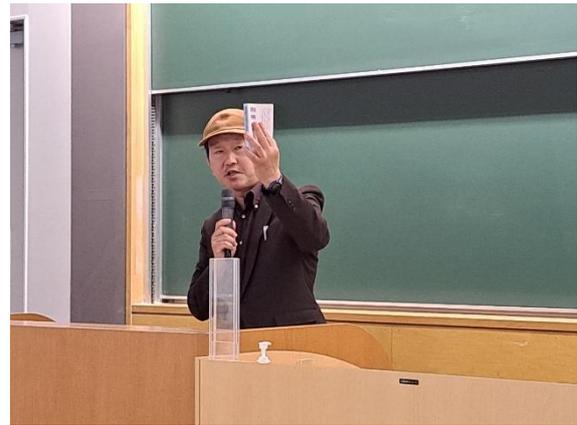


写真4 岡村氏による報告

東京近辺で発生した歴史上の地震の履歴について解説がなされた。また、それらの地震の状況を復元する作業から規則性が示され、それを基に30年以内に高い確率で首都直下地震が起こる将来予測が提示された。

そして、報告2の鷺崎氏には日本経済史・経済地理学の分野から「関東大震災と丸の内・内幸町—東京経済と三菱における地所経営の変容—」とのテーマでご報告いただいた(写真3)。日本経済史における関東大震災の影響や位置づけについて整理がなされた後、三菱財閥による東京での地所経営の実態について、とりわけ丸の内の内幸町における地所経営の動態について詳細な報告がなされた。関東大震災は復興過程において東京の都市化を進展させつつも、借地法の成立や地代上昇といった当時の状況を鑑みると、関東大震災は大土地所有者による地所経営において貸家が売却される動向を助長させる位置づけであった結論が示された。



写真3 起雲閣の建物と庭園



写真5 全体討論における4氏



写真6 会場の参加者の様子

最後に、報告3の岡村氏には表象文化論の分野から「故郷喪失から新たな故郷へ—芥川龍之介、堀辰雄、立原道造の関東大震災経験—」とのテーマでご報告いただいた(写真4)。芥川龍之介と堀辰雄、立原道造がそれぞれ師弟関係にあったことや東京の下町で育ったことを踏まえ、それぞれの震災経験やその後の人生における震災の影響について報告がなされた。特に、作家(詩人)だけでなく建築家でもあった立原道造については、文芸作品と建築作品の両方から下町である故郷に対する郷愁と、東京郊外や軽井沢などの避暑地において新たな故郷の創出の両面が見い出されるとの指摘がなされた。

各氏のご報告後、宍倉報告に対しては前空会員から、鷺崎報告ならびに岡村報告に対しては米家会員からそれぞれ論点の整理などのコメントが示された。そして、それらの講演や報告、コメントを踏まえて、登壇者を中心に活発な全体討論が行われた(写真5)。

さまざまな専門分野の方々にご登壇いただいたことで、多様な観点から関東大震災による東京への影響を再考することができたと考える。会場には本会の一般会員や学生会員だけでなく、非会員の一般の方の来場もあり、合計71名の参加者があった(写真6)。全体討論も白熱し、その後の場所を変えての延長戦(懇親会)での議論も尽きなかったことを考えると、有意義なシンポジウムであったと言えよう。ただ、集会委員の立場としては、もう少し多くの方に参加してもらいたかったのが本音である。特に、一般会員の方に来場してもらいたかった。今回のように対面形式で例会を開催すると、その場所に足を運んでもらう必要があるために参加者が減ることになる。その点、

物理的な移動を伴わないオンライン形式での開催は参加者にとっては利便性が高いであろう。しかし、対面形式での開催は臨場感など場の雰囲気を楽しむことができ、それゆえ議論が盛り上がることができる。地理学という学問の性格上、そのような場の雰囲気は大切であると考え。是非とも積極的に会場に足を運んでいただきたいと願っている。

(集会委員会)

会計委員会より

会費を滞納されている方にお知らせ致します。本会は2年以上滞納されたら納付の督促を行い、3年以上滞納されたら会誌等の発送を停止しております。また滞納期間が5年に達しますと、自動的に除籍する対応を取っております。会員各位におかれましては、住所変更等で学会からの連絡が届かず、結果として会費滞納状態になっている方もいらっしゃると思います。住所変更等がありましたら、かならず学会にお知らせいただきますようお願い致します。また、卒業後、学生会員は一般会員となります。卒業された学生会員はメール等でお知らせ下さい。メールアドレスの登録を推進しております。学会ウェブサイトより学会メールを利用してお知らせください。

<<会員動向>>

(2023. 8. 9~2023. 12. まで。敬称略、申し込み順)

【入会】

- ・[一般] 向出 知佳(石川)
- ・[学生] 松澤 均(群馬)、荒川 晶生(東京)、西村 祐介(東京)、細谷 渉(神奈川)

【退会】

- ・小野寺 尚志(神奈川)、小泉 信三(神奈川)、千代 正清(長野)、吉田 正幸(千葉)
(いずれも年度末退会希望。)

機関誌「法政地理」の PDF化完成のお知らせ

今年度の総会でお知らせしましたように、会員の利便性向上に資するために行っていた法政地理のPDF化が完了し、法政大学図書館ウェブサイトの学術機関リポジトリで1号からすべて閲覧できるようになりました。法政大学図書館のサイトからも閲覧できますし、学会ウェブサイトにもリンクが張られておりますので、「トップページ」→「研究論文・出版物」→「機関誌」とクリックしていただければ閲覧できます。また、学会ウェブサイトには、図書館のサイトより簡単な検索機能があり、キーワードを入力すれば、関係する論文、研究ノート、文献紹介、フォーラムなどに容易にたどり着くことができます。論文やレポート作成、文献収集などに是非ご利用下さい。

(編集委員会)

2023年度法政大学地理学会地理学研究奨励金の授与について

2023年10月9日に桜美林大学に於いて、法政大学地理学会地理学研究奨励金授与審査委員会を開催し、下記の者に授与することに決定した。

・吉原圭佑(法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻博士課程)

授与対象論文：グローバルアライアンスと国際航空路線網の変遷(法政地理第55号掲載)

・石川恵架(法政大学文学部地理学科2021年度卒業)

授与対象論文：1980年代を知る人々からみた神田学生街の変容(法政地理第55号掲載)

2024年1月20日発行

編集 法政大学地理学会庶務委員会

発行 法政大学地理学会常任委員会

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学文学部地理学教室内

Fax. 03-3264-9459

E-mail hoseichiri@chiri.info

Web <http://www.chiri.info/index.html>

郵便振替 00170-9-167442